

サイレント・ウェイ(The Silent Way)

【理念・特徴】

教授は学習に従属する 学習の第一義は模倣や反復ではない 学習者の主体的問題解決を重視 自己の認知力に対する自信を育てる 教師は学習目的を明示するのみ
問題を提示したあとはできるだけ「沈黙」する 教師からは目標言語での発話がほとんどない 正答をほめたり誤答を直接訂正したりしない 学習者相互に学ばせる

【教授作業】

発音指導は「カラーチャート」(color chart)による 教師は発音の手本をほとんど示さない 韻律的特徴はジェスチャーや図解などによって示す
発音指導とともに単語・短文を導入 導入は直接法 補助教材として色と長さの異なる棒(rod/algebraic)を使用 抽象的な状況も「棒」で提示 「教科書」はない
文字導入は発音と若干の単語導入のあと 文字は発音と対照した図表(sound-color fidel)で提示 「カラーチャート」の色彩により表記と発音のずれを視覚化
既習の単語は色彩文字によって表記したリストに掲示 いわゆる「教科書」はない

【提唱者と著作】

Caleb GATTEGNO(1963) Teaching Foreign Languages in School: The Silent Way, New York: Educational Solution Inc.

----- (1976) The Common Sense of Teaching Foreign Languages, New York: Educational Solution Inc.

【利点と問題点】

* 最小の語彙で最大の言語活動が可能 学習者が主体的に学習 学習者相互の人間関係が良好に 文字導入が早い 発音と表記の関係が明確に

* 教師の指示が不明確な場合に学習目標が徹底しないおそれあり 中級以上のレベルへの応用に積極的発言なし 韻律レベルの音声要素の処理に工夫必要

【日本語教育への応用】

「語学文化協会」(在大阪)のアラード・房子氏が実践 中級以上のレベルではCLLを応用 (同協会への連絡は 〒530-0028 大阪市北区万歳町 3-41 城野ビル 204)

「早稲田大学日本語教育研究センター」で、2008年～2013年の間、初級クラスで実践
アメリカの次の機関での実践報告あり：ノースカロライナ大・アリゾナ大・コロラド大・ILS(NYC)

ヴェルボ・トナル法(Verbotonal System)

【理念・特徴】

基本理論「全体構造視聴覚主義(structuro-globale audio-lingual theory)」 言語表現は、それ全体で一つの統合的なまとまりであり、部分に分解して学ぶのは不適切 もともとは、聴覚障害者の第一言語習得のために開発された理論と指導法 障害者が受容できない周波数の音を、身体運動感覚を通じて補償する この教授法を外国語学習に応用

教材は、スライドで場面提示をし、そこに短文の目標言語表現を与える 言語全体の音調や音感覚をそのまま習得する 全体性重視のため、リズム・イントネーションの習得に力点 個別音の矯正にも、他の教授法にない理論と指導テクニックあり

【教授作業】

スライド教材を見ながら場面を把握し、与えられた音声情報をそのまま繰り返す スライドを見て該当する音声情報が繰り返せるようになるまで口頭練習 その後、文法解説とともに文型や語彙の確認 習った文型や語彙を使っての発展練習 この間、発音に問題があれば丁寧に矯正 発音矯正は、音律レベルを重視するが、単音矯正も軽視せず

【提唱者と著作】

Petar GUBERINA (1972) *Case Studies in the Use of Restricted Bands of Frequencies in Auditory Rehabilitation of Deaf*, Zagreb: Institut de Phonetique.
----- (2013) *The Verbotonal Method*, edited by Claude Roberge, Zagreb: Artresor

【利点と問題点】

韻律レベルから音素レベル至るまでの発音矯正に一貫した理論と指導法あり 場面と音声情報の結合の全体性を大切にするので、自然なイントネーションの学習が可能

スライドのイラスト次第では、文化的情報が伝わりにくいおそれあり 文法学習が文構造重視で、コミュニケーション重視ではない

【日本語教育への応用】

「日本ヴェルボトナル普及協会」(在東京)で指導書『聴覚・言語障害教育および外国語教育のための VTS 入門』(2002) (小坏博子・木村政康・川口義一・安富雄平編著)と教材を発行 教材は音声情報の質が高くなく、ほとんど使用されていない 音声指導や発音矯正のテクニックは評価が高く、早稲田大学「日本語教育研究センター」などで応用

トータル・フィジカル・レスポンス (TPR)

【理念・特徴】

幼児の母国語習得過程をモデルに 発話力より聴解力優先 目標言語の構造の概観 (cognitive map) は聴取によって内在化 準備 (readiness) が整えば自発的に発話が始まる 発話の強制は心理的抵抗を生む 聴解力は筋肉運動知覚 (kinesthetic sensory system) に訴えて獲得させる 目標言語を命令文で与え、身体動作で反応させて理解を確認 初期の発話の不正確さには寛容に 右脳による情報伝達重視

【教授作業】

入門期の 15-16 時間は身体反応のみ 動詞→目的格の名詞の順で導入 形容詞・副詞・複文構造も命令文で 文字導入後は書くことを指示 「教科書」はない

12 時間前後の時点で既習命令文の文字化したものを与える 教師が読み、学習者は身体反応のみ その後適宜新出語彙や文型を板書して音声を視覚化 35-36 時間の時点で既習の語彙や文型を使った短い物語を読み与える 物語の筋どおり身体反応 その後、物語の内容に関して質問 答えは Yes-No→単語→文と段階的に 最後に物語と質問のプリントを配布して教師と共に音読 質問の正解は板書

発話は学習者個々を見て 「準備」のできている学習者に教師役を その後適宜、質疑応答・ロールプレイ・ゲームなどで発話を促す 発話中の発音矯正はしない

【提唱者と著作】

James J. Asher(1977) Learning Another Language through Actions: The Complete Teacher's Guidebook, Los Gatos: Sky Oak Production ('86 3rd ed.)

(現在 ; 5th ed.)

【利点と問題点】

* 聴解力の養成に威力 応用が簡単で、他の教授法とも併用が可能 聴解力優先だが、四技能の総合的習得にも配慮 発話が自主的に生まれる

* 発話力の開発消極的 発音・文法の矯正 (fine tuning) に具体的提案なし

【日本語教育への応用】

完全導入は 1984~1994 江東区「中国帰国者日本語学級会」から 併用導入は、早稲田大学「日本語教育研究センター」・「コミュニカ学院」(在神戸)・「国際救援センター」で 米国ではサジェストペディアとの併用実践例あり ドイツ・メキシコ・タイにも実践例

ナチュラル・アプローチ (Natural Approach)

【理念・特徴】

テレル (Terrelle, Tracy D.) が母語習得の過程を観察し、実践を積み重ねた教授法を、クラッシュェン (Krashen, Stephen D.) が「五つの仮説」で理論化 仮説①「習得・学習仮説」で「習得 (acquisition)」と「学習 (learning)」を区別し、前者を重視 仮説②「自然順序仮説」で文法要素の習得に自然な一定の序列 (natural order) を仮定 仮説③「モニター仮説」で「学習」で得た言語知識は正確さをチェックするモニターとしてのみ機能し、発話の算出に貢献しないと主張 仮説④「インプット仮説」で「i+1」のインプットで習得が起こると 仮説⑤「情意フィルター仮説」で「情意フィルター (affective filter)」が低い状態でのインプットを奨励

【教授作業】

自己紹介→身の周りのものの説明→感情→経験など、学習者に近い部分に関連する表現を担う文法要素から段階的に指導 学習トピックとして学習者の嗜好や思想など情意に訴えるものを活用 学習内容に目標言語文化の紹介を積極的に導入 クイズやゲームを利用 目標言語を使用した「発見学習」を奨励 具体的な教授技術は、TPR を推奨 独自の教授テクニックや教材は存在せず

【提唱者と著作】

Stephen D. Krashen (1981) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*, Oxford: Pergamon Press

Krashen, S. D. & Terrelle, T. D. (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in Classroom*, Oxford: Pergamon Press

【利点と問題点】

* 実践重視 応用が簡単で、他の教授法とも併用が可能 発話を強制しない 四技能の総合的習得にも配慮 話しやすい話題や内容により、個人志向の自然な発話が可能に

* 意識的文法学習の位置づけが不安定 発音・文法の矯正 (fine tuning) に具体的提案なし

【日本語教育への応用】

早稲田大学「日本語教育研究センター」で 1998 年～2013 年の間、TPR 応用の理論的支柱として実践